
がらくたくえすと

てる。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

がらくたくえすと

【Nコード】

N8687Y

【作者名】

てる。

【あらすじ】

青年が家の倉庫で見つけた剣は、世界を救う最強の”がらくた”？
王道RPG風コメディックファンタジー、開幕！

1・宝探しタイム(前書き)

初投稿作品です。

完全不定期の更新となる予定ですが、完結までがんばります！

なお、本作品は筆者が「昔作ろうとして挫折したRPGのシナリオ」を基にしていますので、ゲームのノベライズ作品風に仕上がればいいなあ、などと思ってたりします。

では、本編どうぞ。

1・宝探しタイム

序章へ旅立ちへ

side ????

「そこで反省している!」

尻餅をつく形になった俺の目の前で、頑丈な扉が閉じられる。直後に聞こえたがちゃり、という音はきつと鍵が閉められた音だろう。つまり俺は、閉じ込められたわけだ。

わけだ。じゃねえ!

いったい!どうして!こうなった!

へ回想へ

うちのメイドー(以下メ)「きゃああああ!」

親父ー(以下父)「どうした!」

メ「旦那様!厨房に怪しい影が!」

父「何だと?よし、わしが行こう!」

父「何者じゃ!」

俺「ふへ?(がぶがぶ)」

父「……………」

俺「……………」(もぐもぐ)」

父「お〜ま〜え〜と〜い〜う〜や〜っ〜わ〜!」

俺「あ、あの、親父?(ごっくん)」

父「何をしとるか……!」

〜回想終了〜

うん、原因判明。^{じまみぐい}

いや、ね？ほら、年頃の男子ってのは他人より腹が減る生き物な
のですよ？それがあんな程度の昼飯で足りるわけが・・・ねえ？

「しっかしあれだね。つまみ食い程度で物置送りとは・・・親父も
古いね。」

誰に、というわけではないがごちてみる。

べつに俺には電波受信機能なんてついてないぞ？・・・たぶん。

「その分だと反省してなさそうだな、マテウス。」

な？！何処からか声が！！

べ、別に俺は怪電波なんて受信できないぞ？それとも、まさか・・・
？くそう、俺は電波じゃない俺は電波じゃない俺は電波じゃない
俺は・・・あだっ！

はい、頭に何か当たりました。いえ、当てられました。石を。

「こつちだこつち！何を幽霊としゃべつとる！」

ふと俺が斜め上を向くと、そこには見慣れた顔が。天窓・・・つ
て程も高くはないが、一応ここには窓があるのだ。ちなみに、何で
か鉄格子つきである。

まあ、それはさておき、

「おー、兄貴。何、助けてくれんの？」

「あー、それはないから安心しろ。」

ぐはあっ！

「じゃ、じゃあ何しに来たのさ？」

「決まってんだろ、茶化しに。」

へぶうっ！

「それと、親父から伝言な。『お前、晩飯抜き』だってさ。」

あべしいっ！

く、くそう、この性悪兄に一矢報いるには・・・

ぼく、ぼく、ぼく、ちーん！

「あー、平気。兄貴の部屋の菓子見繕って喰うから。」

「なっ！て、てめ、なぜそれをつ！？」

ふふふ、我が兄貴（超甘党）の部屋に菓子の買い置きが山のようにあることなんぞ、両親はともかく俺やメイドたちにとっては公然の秘密というものなのですよ？

「つく、わ、我が弟ながら、やるな・・・！」

「ってかバレてないと思ってた兄貴の思考・・・よりも嗅覚か、心配だね俺は。」

だって、あの部屋、匂いが甘つたるいんだもん。

「やかましわ！・・・ったく、何でこの手の目端と剣の腕だけは利くかね？」

はい、アンタがそれ以外パーフェクトな超人だからです。

そうなのだ。実はこの兄貴、荒事以外は怪物級の超優等生なのだ。何しろあの名門ラウス神学校を首席で卒業し、我らが連盟国枢軸議会の議員たる親父の秘書としてすでに各界のセレブたちに名と顔を売りまくっているうえ、ケンカはからきしのくせにそれ以外の運動は万能、しかも水準はるか上のイケメンと来たもんだ！

うん、実の兄じゃなかったら、石のひとつも投げたくなるよね。

とまあそれはさておき、仮にも名家の次男坊と呼ばれてきた俺ですよ？何かとりえのひとつもないと悲しいじゃない？ってことで、剣だけは本気で鍛えましたともさ。そういう学校にも通ったし。

いい剣士の条件って何だと思う？答えは目が利くこと。相手の力量を読むことに始まって、相手の剣筋を読むこと、自身の剣筋の正確さ、どれもこれも目が最初に働いてこそなんだよね。もちろん、生物学的なものだけじゃなくってさ。

ってわけで、この2つにかけちゃあちよいと自身がある。

「しよーがない、後でなんか持って来てやるよ。ただし、部屋の菓子の子のことは……。」

「オツケ、いやー、いいあにきをもってしあわせだなー。（棒読み）

」
「言ってる。」

そういつて兄貴は引っ込んだ。

よっしゃ、晩メシ確保！て自重しろ俺。閉じ込められてる状況に変化なし！

「しやーない、せつかくの倉庫だし……お宝探索開始じゃ〜〜！」

しばらくお待ちください

「うーむ、めぼしいのはこれだけか……。ち、シケてやがる。」

まあ俺の不謹慎発言はともかく、本当にこの倉庫はガラクタ置き場といった体だった。親父もそれなりの名士のはずなのだが、おいている場所が別なのかたいした物はなかった。

そう、ひとつだけを除いて。

「宝箱……。だよな。なんつーベタな……。」

宝箱。それ以外に表現のしようがあるうか。

朱く塗った木の板で組んだ蓋つきの箱に、鋼鉄製の金具で補強がかけられている。鋸打ちまでされたそれは、明らかに「宝箱」だ。

鍵は……。ついてない。

「無用心だな……。よつと。」

さて、中身はと……。自重？なにそれおいしいの？

「……。剣……？」

2. すげー剣ゲット!・・・?

side マテウス

「・・・剣・・・? いや、刀か?」

うん、刀。

しかも結構禍々しい感じの拵えがついてるやつ。鞘の形からも、サーベル系の曲刀だったことが判る。

俺は当然その剣を抜いた。そりゃね、俺も剣士な訳ですよ。目の前に剣がポンとあって、見定めたくなるのって当然だと思うわけですよ。

でも・・・わからん。

「真っ黒・・・つやも光沢もなし、黒刀、って奴か。珍しいな。」

8

黒刀っていうものは、一般の刀より目利きがそもそも難しい。まず金属が何なのか、次にその金属の特性、そしてその錬性、そして切れ味に美術的価値と、見極める項目が多い。

だつてのに、流通量自体がそもそも皆無。世界中のどこに行っても黒刀なんてものは売ってないのだ。「教会」の指定で取引が禁じられてるから、っていうんだがその理由、俺知らないんだよねえ。

まあそんなわけで、黒刀ってのは目にする機会がない。俺自身、図鑑や上流階級が趣味で開いてる「秘宝館」っていう博物館（親父が招かれて連れてかれた）くらいでしか見たことない。こういったものは許可もらってるらしいけど、詳しい話は知らん。兄貴と違って俺力ミサマ興味ないし。

まあ、見てもわかんない品だっことは理解いただけだと思う。

「てっ！はっ！てりゃ！」

わかんないんだから、とりあえず振ってみる。うん、いい刀だ。

いい刀の定義って人によると思うけど、俺はなんといつても扱いやすさと剛性だと思う。盾の無い片手剣の流派を修めた俺としては、振り軽いことと受けても折れないことが求められる。切れ味は・・・その次くらいかね。

そしてこれは、俺が触れたことのある中でも最高の刀だった。重心が絶妙なのと、残心時の手応えで剛性も伝わってくる。そして風切り音から察するに、切れ味も相当のものだ。

「・・・いいな、これ」

やばい。

テンション上がる。

「しびれや————！！！！！！」

何、今の？

兄貴の声だった。

悲鳴・・・だったよな。

「つち、何があつた!？」

あの兄貴は、大概冷静だ。俺がおちよくつてもうるたえる程度で、決して醜態は見せない。兄貴の叫び声なんか、産まれてこのかた聞いたことが無かつた。

それだけで、非常事態が見て取れる。

「くそ、何とかここから出ねえと……。」

出たところで何が出来るとも思うだろうが、兄貴はケン力はかきし、親父もいい歳だ。万が一荒事のたぐいなら、そう長く戦えるわけが無い。お袋は……言うまでも無い。

「……ごんのやるおあ!!!!」

俺は扉を全力でぶん殴つた。頑丈な扉である。殴つたところでどうしようもないのは目に見えてるが、何もしないわけにはいかなかった。

そして結果は、真つ二つ。

真つ二つ?なんで?

俺は恐る恐る右手を見た。

「……どーいう切れ味してんだ、この刀。」

うん、刀、握りっぱなしだったよ。

ってか非常識な刀だね。握つたまま殴つただけで、俺別に振つ

でもないよ？ちょっとしたブレで扉に当たった刀身が、木製とはいえ倉庫の扉クラスの頑丈な戸板真っ二つだよ？

「……ってそれどこじゃねえ、兄貴！」

俺はこの刀の鞘を急いで腰に差し、倉庫を飛び出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8687y/>

がらくたくえすと

2011年11月26日00時47分発行